

岡山県熊山遺跡群採集遺物について

大河内 栄 子 ・ 福 田 正 継 ・ 白 石 純

— 論 文 要 旨 —

国指定史跡「熊山遺跡」は、方形基壇の石積遺構で、仏塔説が有力となっている。この報告では、この遺跡を中心とした熊山山塊には30基以上の石積遺構が存在し、この遺構の周辺や、尾根筋の平坦面から多数の遺物を採集した。種類や器種では、須恵器および土師器の杯・碗・小皿や備前焼、瓦などで、貴重なものとしては、須恵器の多口瓶、円面硯、風字硯、瓦塔（須恵質・瓦質）などである。時期は採集遺物から8世紀後半から15世紀頃までと推測され、遺物の質、量から非常に重要な遺跡群であることを再認識した。また、これら採集遺物の須恵器について自然科学的手法による産地推定を行ったところ、ほとんどが備前地域で生産されていることが推定された。今回は、採集遺物を中心に紹介し、今後の熊山遺跡群研究の基礎資料となることを目的として報告した。

キーワード：熊山遺跡、瓦塔、多口瓶、硯、瓦、生産地推定

1. はじめに

熊山遺跡群¹⁾は、国指定史跡「熊山遺跡」を中心とする周辺部に所在する遺跡のことである。この遺跡群は、赤磐市、備前市、岡山市の三市にまたがり分布しており、中心となる熊山遺跡（熊山神社境内1号遺跡）は、吉井川東方に位置する備前最高峰（標高508m）の熊山山上に所在する三段の方形石積遺構である（熊山町文化協会1974）。

今回報告する遺跡は、報告者の一人である大河内栄子が、2014年頃より遺跡の踏査を行い、遺物を採集したものである。各採集地点は、イノシシ等による捕食のための掘り起こしで遺物が地表面に散乱している状態であったため、遺物が散逸することが十分想定されることから採集を行った次第である。

この報告では、熊山遺跡群のうち採集遺物が多く時期のわかるものを中心に報告することとした。その結果、11地点について、採集地点ごとに記載し、遺跡の立地や遺物について検討した。なお、ほとんどの採集遺物は、大河内栄子によって採集されたものである。（大河内：白石）

2. 採集地点（第1図）

遺物の採集地点は、11ヶ所である（第1図）。以下、採集地点の位置、採集遺物について報告する。なお、遺物に関しては、器種等がわかるものを抽出して報告した。

（1）A地点（山頂三角点1号遺跡周辺）

熊山遺跡の東方の標高507.8mの山頂三角点1号遺跡²⁾地点の周辺部で採集した。この山頂部には、約10m×6mの巨岩が存在し、10～40cmの石で石積が造られていたようであるが、現在は崩落散乱し、古備前焼（鎌倉期か）が採集されている（熊山町文化協会1974）。採集したところは、この巨岩の西南約10～20mの斜面部地表面に遺物が散乱していた。

採集遺物は、第2図1～13である。

須恵器（1～8・13）

1は杯蓋の宝珠つまみで、中央部が少し高くなっている。2・3は杯蓋の口縁部破片で、口縁端部が下方に屈曲している。

4・5は、輪高台を有する杯身である。外面底部の高台内側は、回転ヘラ削りである。6は底部断面の厚さから輪高台を有する壺と考えられる。7・8は平高台の杯身で、外面底部は回転ヘラ削りである。

13は甕の口縁部で、緩やかに外湾し斜め上方に立ち

上がり、口縁端部は断面三角形を呈している。

土師器（9～12）

9・10は杯の底部で、斜め上方に立ち上がる体部と考えられ、外面底部は回転ヘラ削りである。

11は小皿で、底部外面は回転ヘラ削りである。

12は壺の口縁部で、斜め上方に屈曲して立ち上がり、口縁端部は断面が三角形を呈している。

（2）B地点（猿田彦神社周辺）

熊山遺跡から東方約40mに猿田彦神社（江戸期創建）の祠が西を正面に建立している。この地点は、霊山寺跡敷地内の東端に位置し、祠の東と南の斜面に遺物が散布している。

採集遺物は第2図14～30、第3図31～34である。

須恵器（14～24）

14は輪高台の杯身で、外面底部の高台内側は回転ヘラ削りである。15～17・19は、平底の杯身で、17・19は底部がやや丸みを呈している。19以外は外面底部が回転ヘラ削りで、19は回転糸削りである。

18は皿で、外面底部は回転糸削りでそれ以外は回転ナデである。

20は多口瓶で、口縁部が3ヶ所つくと考えられる³⁾。

21～23は備前焼の壺で、21は口縁部から体部にかけての破片で、肩部に凹線文が施されている。22・23は底部で、23には粘土の接合部分が確認できる。

24は、備前焼播鉢で推定口径29cm、推定底径12.4cmを測り、体部で器壁が薄くなり口縁部にかけて内湾し、端部付近で器壁が厚くなり上下に拡張している。内面には8条を単位とするスリ目が施されている。

瓦（25～34）

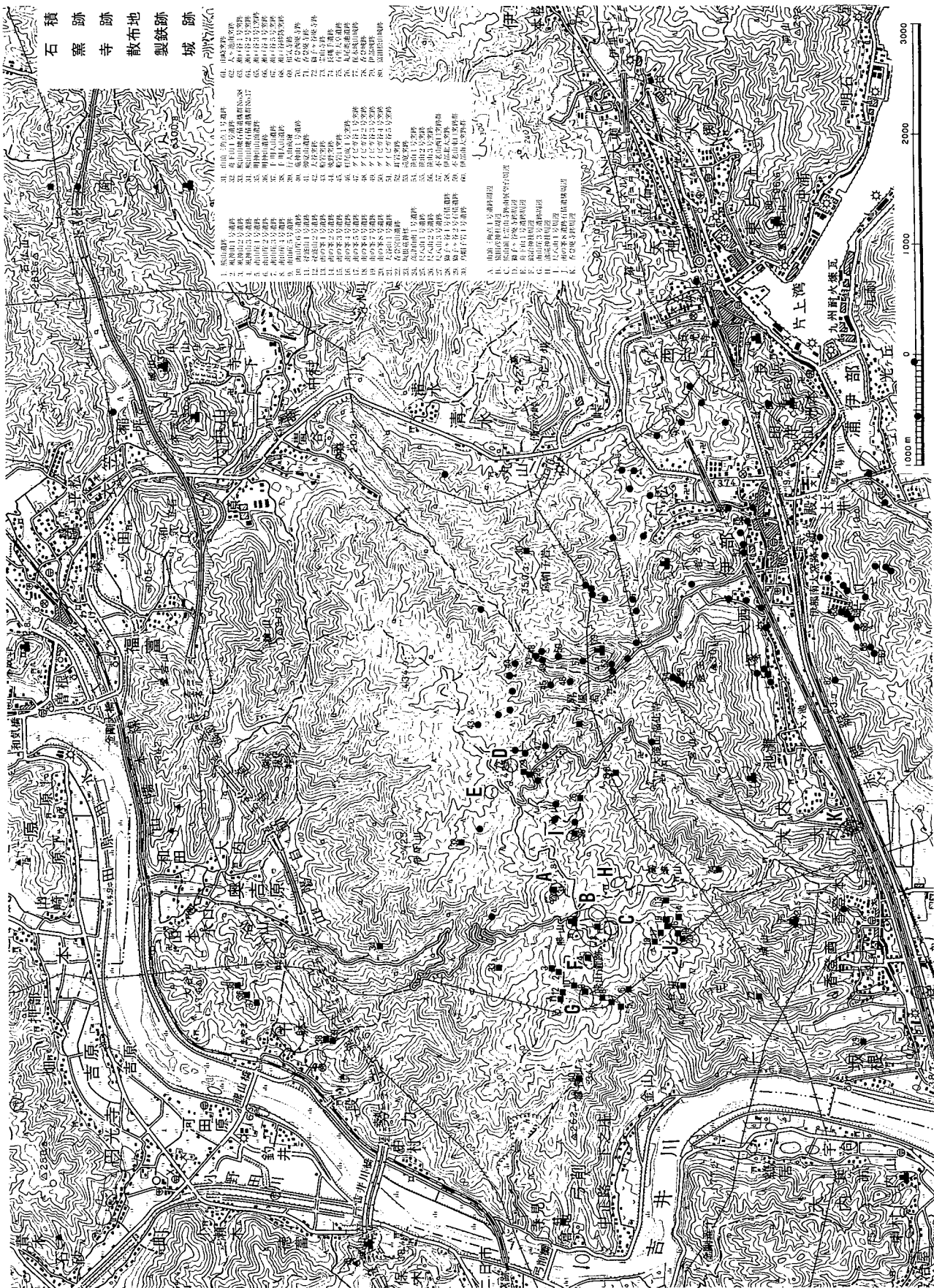
25は径約12.6cmを測る軒丸瓦で、文様は複弁八様蓮華紋で、複弁の間には直線的な形状の間弁を配している。中央部には1+6の連子を配した径約4.8cmの中房が存在し、外区内縁の二重圏線内には珠紋が認められる。なお、今回報告する瓦では唯一の軒丸瓦である。

26は丸瓦で、凹面には布目が認められ、凸面は斜め方向の平行叩きが施されている。

27～34は平瓦で、27の凹面には、斜め方向の平行叩きのあと、縦方向の粗いナデを施している。凸面は斜め方向の平行叩きである。28は凹面が布目で、凸面は斜め方向の平行叩きが施されている。29・30の凹面には布目が認められ、凸面は細かい格子叩きが施されている。31～34の凹面には、布目痕が認められ、凸面は格子叩きである。31・32には離れ砂も観察される。

（3）C地点（熊山頂上霊山寺跡南展望台周辺）

熊山遺跡が所在する山頂部の霊山寺跡の南面には展望台が整備されている。この展望台の南斜面で多数の遺物



第1圖 遺跡位置圖

を採集した。

採集遺物は第3図35～73、第4図74～87、第5図88～99である。

須恵器 (35～60)

35・36は輪高台の杯身で、外面底部の高台内側は、回転ヘラ削りである。37は平底の杯身で、外面底部は回転ヘラ削りである。

38は碗と考えられ、体部は内外面とも回転ナデで、外面底部は回転ヘラ削りである。また、内面には「寺」のヘラ書き文字がみられる。

39は台付鉢で、外に張り出すしっかりした高台が付き、外面底部には回転糸切り痕跡で、それ以外は回転ナデが施されている。

40～52は碗で、このうち40～45は口縁部である。いずれも緩やかに内湾して斜め上方に立ち上がり口縁端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデが施されている。46～52は底部で、外面底部は回転糸切りが施されている。いずれも備前系須恵器碗と考えられる。

53～57は小皿で、底部から内湾して立ち上がり端部は丸く終わる。外面底部は回転糸切りである。なお、この小皿は前述した備前系須恵器碗と一緒に生産されていると考えられる(石井ほか2012)。

58～60は杯で底部から斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。外面底部は回転糸切りで、それ以外は回転ナデを施している。

土師器 (61～71)

61～67は碗で、64・65が口縁部で底部から内湾して立ち上がり、外面体部の中位に鈍い稜が認められる。また、61～63・66・67は高台が付く底部で、高台断面は三角形を呈しているものが多い。なお、これらはすべて吉備系土師器碗である。

68～70は小皿で、斜め上方に立ち上がり口縁端部は丸く終わり、外面底部は回転ヘラ削りである。

71は外面底部に回転糸切りの痕跡が存在する杯である。

瓦質土器 (72・73)

72・73は瓦質の羽釜である。72はわずかに内湾して立ち上がり口縁端部は器壁が薄くなり、外面の口縁直下には断面が長方形の鰐がほぼ水平に張りつく。内外面とも全体に回転ナデを施している。73は全体的に器壁が薄く、底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げ、外面の口縁直下には、やや大きめの鰐がつく。内外面とも回転ナデを施している。

瓦ほか (74～90)

74・75は軒平瓦である。どちらも残存部が極めて少なく、詳細は不明である。

76～80は丸瓦で、凹面はすべてに布目痕跡が認められる。76の凸面は縄目叩きの痕跡が、77・78・79の凸

面には縦方向の平行叩きが施されている。80の凸面は格子叩きの痕跡が観察される。

81～88は平瓦で、81・82・83の凹面は布目の痕跡が、凸面には縦方向のナデを行っている。なお83の両面には自然釉が付着しており、焼成が極めて良い。

84・86は、凹面が布目で、凸面に縄目叩きを施している。85は凹面が布目で、凸面は横方向のヘラ削りを行った後にナデを施している。87は凹面に布目が認められ、凸面が格子叩きである。88は凹面が布目で、凸面は格子叩きである。

89は鬼瓦の破片と考えられ、表面には板状工具によるナデ痕跡があり、横方向に数条の凹線が認められ径約4.0cmの珠紋が施されている。

90は仏具を模倣した瓦質土器で、外面底部付近に鐙状の扁平な突帯が張り付き、底部には外にしっかり踏ん張った高台が付く。

備前焼 (91～99)

91～95は壺の口縁部である。いずれも端部を折り返して玉縁にし、内外面とも全体に回転ナデを行っている。95は外面の肩部に凹線文が施されている。96は推定口径33.0cm、推定器高10.0cmを測る鉢で、全体の器壁が薄く、内湾しながら立ち上がり口縁端部は方形に終わる。焼成はやや不良で、全体的に色調は灰色を呈している。97～99は播鉢で、そのうち97・98は器壁の厚い体部から、あまり内湾せず立ち上がり、端部は方形気味に終わる。99は口縁端部が上方に突出する三角形を呈している。

(4) D地点(獅子ヶ谷廃寺跡周辺)

熊山遺跡から東方約1.7kmの所在する獅子ヶ谷廃寺跡の北で、三角点(425.5m)の北側に位置し、経塚?(径約4m、高さ約60cm)遺構が存在する(熊山町文化協会1974)。この遺構の中央部が盗掘等?により荒らされていた。遺物はこの盗掘穴より採集した遺物である。採集遺物は第5図100～104である。

須恵器 (100)、土師器 (101～103)、瓦 (104)

100は杯身の底部で、体部は内外面とも回転ナデで、外面底部は回転ヘラ削りである。

101・102は断面三角形の低い高台が付き、外面底部は回転ヘラ削りで、内面および外面体部は回転ナデが施されている。103は、断面三角形の高台が付き、内外面とも不定方向のナデが施された手づくねで作られた吉備系土師器碗である。

104の平瓦は、凹面が布目で、凸面は格子叩きが施されている。厚さは最大で3.5cmを測る。

(5) E地点(舟下山1号遺跡周辺)

D地点の獅子ヶ谷廃寺跡から北西方向に位置する舟下

山1号遺跡周辺部の地表面より遺物を採集した。この舟下山1号遺跡は、板場池の東で、南西に延びる尾根状の斜面が緩くなるところに所在する。現状は方形二段の石積で、中央に盗掘坑が確認される。熊山山塊石積遺構No.16にあたる（熊山町文化協会1974）。

採集遺物は第6図105～129である。

須恵器ほか（105～122）

105～109は杯蓋の口縁部で、口縁端部が屈曲している。

110～112・114は輪高台を有する杯身で、外面底部に回転ヘラ削り痕跡がみられる。112の外面底部には、「×」印のヘラ書きが施されている。113は器壁や高台が厚いことから壺の底部と考えられ、外面底部は回転ヘラ切りである。

115・116は杯身の底部で、外面底部は回転ヘラ切りである。117は杯身の底部で、底部から体部にかけてカーブを描きながら斜め上方に立ち上がる。外面底部は回転ヘラ切りである。

118は碗の口縁部で、器壁が薄くなりながら内湾して斜め上方へ立ち上がり、口縁部でわずかに屈曲する。内外面とも回転ナデである。

119～121は壺の口縁部である。119は緩やかに外反しながら斜め上方に立ち上がり、端部は肥厚し、端面は平坦となる。120・121は強く外反して端部が上方に屈曲する。

122は備前焼の片口播鉢で、底部から内湾しながら上方に立ち上がり、端部は方形となる。内面には六条が単位のスリ目が施されている。

瓦塔（123～129）

123は家屋の破片と考えられる。端面付近で急に平坦になり、端部は上下に肥厚し、内面には返しが付く。また、外面上端には横方向の沈線が走る。器壁は0.7cmを測る。124は内側にカーブを描きながら立ち上がり、肩部に幅1.5cmの突帯が横方向に付き、その下に高さ0.5cmの三角形の突帯が付く。内外面とも横ナデである。125は若干内側にカーブしながら立ち上がり、カーブ付近で横方向に突帯が付く。突帯の下側には両方に方形のすかしがある。また、突帯の上方には弧状の線刻が施されている。内外面ともナデである。126は縦および横方向に突帯が付く、方形のすかしもみられる。127・128は外側に広がり、127には縦・横方向に突帯が付く、128には縦方向の突帯と方形のすかしが付く。129は横方向の突帯が付く、その下にはU字状のくぼみが横方向に巡っている。焼成は123が須恵質で、124～129が瓦質である。色調は123が青灰色で、124～129は灰黄色である。

（6）F地点（風神山3号遺跡・鍛冶神社周辺）

風神山から南西に延びる丘陵の南端部の平坦面に鍛冶

神社の祠が石垣でコの字に積まれている。遺物採集地点は、この神社より南に広がる平坦面から緩斜面にかけての広範囲で採集できる。

採集遺物は第6図（130～156）、第7図（157～174）である。

須恵器（130～144）

130は坏身の体部から口縁部にかけての破片で、斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収まる。内外面とも回転ナデである。

131は輪高台が付く杯身の底部で、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

132～137は杯身で、外面底部には回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

138・140～143は外面底部が回転糸切りの碗である。140・141には低い平高台がつく。144は小皿で、これら碗・小皿は、備前系須恵器の碗、小皿と考えられる。

139は壺の底部から体部にかけての破片である。体部内面には粘土接合面がみられ、内外面とも回転ナデで、外面底部は静止のヘラ切りである。

土師器（145～171）

145・146は、比較的高い高台を持ち、外面底部の中央部には回転ヘラ切り痕が残っている。

147・148は断面三角形の低い高台を有し、外面底部には回転ヘラ切り痕跡が残る、それ以外には丁寧な回転ナデが施されている。

149～156は外面底部が回転ヘラ切りの杯で、底部から体部にかけて明瞭な稜線がみられるものとそうでないものの両方がある。

157～159は小皿で、外面底部に回転ヘラ切り痕が認められる。この外面底部が回転ヘラ切り痕跡を有する杯と小皿はセットになって、瀬戸内海北岸地域の備前・備中・備後に広く分布している（福田1981）。

160～167は外面底部に回転糸切り痕を有する杯で、168～171は外面底部に回転糸切り痕を有する小皿である。

瓦塔（172）、瓦（173・174）

172は瓦塔で縦および横方向に台形状の突帯がつく。焼成は須恵質で、色調は青灰色を呈している。

173・174は平瓦で、173の凹面には横方向のナデが施し、凸面には不明瞭な格子叩きが認められる。174の凹面は布目で、凸面は格子叩きが施されている。

（7）G地点（南山崖3号遺跡周辺）

熊山遺跡西方の標高620～630m付近を、頂きとする緩やかな南山崖が位置し、この山崖の尾根状には6基の石積遺構が存在する。このうち遺物を採集したのは、南山崖3号遺跡の石積遺構があるところから南に緩やかに下る緩斜面である。この緩斜面は2～3段の段上を呈して

いる。なお、この地点は、既に高橋伸二氏により報告されている（高橋2009）。

採集遺物は第7図175～186である。

須恵器（175～186）

175～179は杯蓋で、175と176には扁平な宝珠がつく。177～179は口縁端部が屈曲している。このうち178は器高がやや高い。

180～182は輪高台を有する杯身で、外面底部には回転ヘラ削りの痕跡がみられ、高台がしっかりしたものと、やや丸みをもつものがある。183は杯身の体部から口縁部にかけての破片である。

184・186は壺で、184は斜め上方に開き、口縁近くでやや外反し、端部は丸く終わる。186は体部の中位の破片で、肩部がやや張っている。

185は金属模倣の稜碗の口縁部と考えられる。

（8）H地点（油滝神社周辺）

A地点の山頂三角点から南に尾根が延び、標高約450m付近に油滝神社が位置し、この神社の北側の緩斜面に遺物が散乱している。

採集遺物は第7図187～200、第8図201～228、第9図229～233である。

須恵器（187～208）

187～189は輪高台を有する杯身で、外面底部は回転ヘラ削りである。190～192・195～198は杯で、外面底部は回転ヘラ削りである。193・194は斜め上方立ち上がることから輪高台がつく杯身と考えられる。

200は円面硯の上部破片である。陸部分が非常に滑らかで頻繁に使用されていたことが伺える。推定径約25.0cm。

201～207は平高台が付く碗で、高台のしっかりしたものから、そうでないものまでみられる、外面底部は回転系切りである。208は風字硯の破片である。現存長さ5.5cm、最大幅3.8cm、脚高さ1.6cmを測る。

土師器（209～224）

209・210は比較的高い脚を有する高台が付き、外面底部には回転ヘラ切りが認められる。

211・212は断面が三角形の高台が付き、内外面とも不定方向のナデが施された手づくねの吉備系土師器碗である。

213は杯で外面底部が回転ヘラ切り、214・215は小皿で外面底部が回転ヘラ切りである。

216～223は外面底部が回転系切りの杯である。

224は灰白色を呈する土師器の羽釜で、推定口径29.0cmを測り、内湾して口縁端部に至り端面は丸く終わる。

平瓦（225～233）

225は凹面に布目が認められ、凸面は縄目叩きの痕跡

が観察される。

226～232は凹面に布目痕跡がみられ、凸面には縄目叩きが施されている。

233は凹面が布目で、凸面は格子叩きである。

（9）I地点（尺八山1号周辺）

尺八山山頂から南西約300mに南へのびる尾根があり、この尾根の標高約410m付近の緩斜面で採集した。

採集遺物は第9図234・235である。

234は須恵器の輪高台を有する杯身である。高台は外側にやや張り出しており、外面底部は回転ヘラ削りである。

235は丸瓦で、凹面は布目で、凸面は縄目叩きが認められる。

（10）J地点（南の峯8遺跡石積遺構周辺）

南の峯8号遺跡が所在する南に延びる尾根の南斜面で採集した。なお、この尾根では、新たに2基の石積遺構を確認した⁴⁾。

採集遺物は第9図236～255、第10図256～271である。

須恵器（236～267）

236～241はつまみを有する杯蓋で、中央部と周辺部がわずかに高くなるもの（236）、基石状のもの（237）、中央部がわずかにくぼむもの（238～241）がある。242～248は杯蓋の口縁部破片で、端部が屈曲する。

249～258は輪高台を有する杯身で、高台はハの字状に開くものから、下方に延びるものまでである。外面底部の高台内側はいずれも回転ヘラ削りである。

259～264は杯身で、259・260は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、端部は丸く終わる。内外面は回転ナデで、外面底部は回転ヘラ切りである。261～263は、底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、底部外面は平坦で、回転ヘラ切りである。264は底部外面がやや丸みをおびており、回転ヘラ切りである。

265～267は壺の胴部から肩にかけての破片で、肩部がまるいもの（265）から屈曲するもの（266・267）がある。

土師器（268・269）

268・269は小皿と考えられ、外面底部は回転ヘラ切りである。

須恵質（270・271）

270・271は器壁の薄い須恵質壺の体部と考えられ外面にスタンプを押した文様を描いている。270には草花文と考えられるが、271のスタンプは、はっきりしない。

（11）K地点（香登廃寺跡周辺）

香登廃寺跡は大谷山の南東の麓に位置し、雇用促進住宅内に所在している。遺物採集地点は、この廃寺跡の北

側に谷があり、この谷の東側に尾根が存在し、尾根の東南斜面に遺物が散布している。

採集遺物は第10図272～277である。

備前焼 (272・273)

272・273は備前焼の播鉢である。口縁端部の内側を、つまみながら強い回転ナデを施し、断面三角形となっている。

瓦 (274～277)

274は丸瓦で凹面には布目痕跡が認められ、凸面は縦方向の平行叩きのあと、丁寧なナデを施している。

275・276は平瓦で、凹面は布目痕がみられ、凸面には縄目叩きが観察できる。277は平瓦で、凹面は布目が認められ、凸面は格子叩きが施されている。(福田・大河内・白石)

3. 各採集地点の時期について

今回、報告した11地点は、いずれもこれまで周知されている遺跡やその周辺部で採集した遺物である。ここでは、各地点の特徴ある遺物や時期について報告する。

A地点は巨岩が存在し、その周辺部からは古備前焼が採集されていることが知られていた(熊山町文化協会1974)。しかし今回、新たに8世紀後半頃の須恵器杯蓋や身が採集されたことから、奈良時代まで遡ることがわかった。

B・C地点は、熊山遺跡(国指定史跡)が位置する頂上の平坦部の南西から南端にかけての地点である。まずB地点では、杯類・備前焼・瓦以外に多口瓶(20)を採集した。この多口瓶は県内では類例がなく非常に珍しいものである。また、瓦では、軒丸瓦(25)を採集しており、この地点の特異性が伺える。C地点では、非常に多くの遺物を採集しており、器種としては杯・碗(「寺」ヘラ書き(38))・皿・羽釜・備前焼・軒平瓦(74・75)、丸瓦、平瓦、鬼瓦(89)などである。時期は10世紀以降の遺物がみられ、特に12～13世紀の備前系須恵器碗や小皿を多く採集している。備前焼は12～15世紀にかけての播鉢を採集している。

D地点は、他の地点に比べ、採集遺物が少ないが杯・碗・瓦を採集している。そして時期は明確ではないが、11世紀以降と考えられる。

E地点は、杯類・壺・備前焼・瓦塔を採集しており、時期は、8世紀中頃の須恵器杯蓋や身から10世紀頃の壺(倒卵形)の口縁部があり、特殊な遺物としては、瓦塔の破片を7点(123～129)採集した。家屋の破片(123)や突帯が付き、方形のすかしがある家屋の窓?の断片的な破片である。また、瓦塔の岡山県内での出土例は16遺跡で、寺院跡9遺跡、官衙に関わるもの2遺跡、仏教関連施設が2遺跡などである(亀田2002)。そして、この

地点の瓦塔と類似しているものとして、備前国府関連遺跡であるハガ遺跡E区包含層出土の瓦塔がある。この瓦塔の時期は8～9世紀頃を想定している(草原2004)。なお、E地点の採集遺物の時期は、共伴遺物から8世紀中頃～10世紀頃を想定しておく。

F地点での採集遺物には、備前系須恵器の碗・小皿や外面底部に回転糸切り痕跡を有する土師器の杯・小皿が多く採集している。そして、この地点でも瓦塔の破片を1点(172)採集している。碗や杯などから時期は12世紀以降と考えられる。

G地点は、熊山遺跡(国指定史跡)と同規模の南山屋3号石積遺構が存在する地点で、既に高橋神二氏により報告されている(高橋2009)。今回報告した資料もほぼ同じ時期の須恵器杯蓋(175～179)で、8世紀後半頃である。

H地点では、8世紀後半から14世紀頃までの遺物が採集でき、長期間にわたってこの地点が活用されたことが伺われる。また瓦片も多く採集でき、円面硯(200)や風字硯(208)も採集していることから、何らかの建物が存在していたことは十分考えられる。

I地点での採集遺物は少ないが、8～9世紀頃の遺物を採集した。

J地点は須恵器杯蓋などから8世紀中頃から後半にかけてからの資料を採集した。また、珍しいものとして外面に草花文様のスタンプ(270・271)などを描いたものも採集している。

K地点は熊山の南麓に位置する香登廃寺跡周辺で、採集したものは備前焼と瓦である。備前焼は13世紀頃の播鉢である。

各地点の特徴ある遺物や時期について報告したが、B地点の多口瓶や軒丸瓦、C地点の金属模倣の須恵器、軒平瓦、E地点の瓦塔、H地点の硯(円面硯・風字硯)など非常に貴重な遺物を採集した。このような遺物が採集できる熊山遺跡群に関して、上原真人氏によると備前国分寺跡から真東に熊山遺跡が所在し、熊山山麓の香登廃寺跡では備前国分寺と同範瓦が出土することから備前国分寺と熊山遺跡の関連性を指摘している(上原2002, 上原2015)。このように熊山遺跡群が仏教に関係した山林修行の場として非常に重要な場所として存在してきたことが十分に考えられる。(福田・白石)

4. 熊山遺跡群採集遺物の胎土分析

(1) 分析目的

熊山遺跡群からは、600点近くの遺物を採集した。このうち、須恵器の器種や特徴あるものを中心に胎土分析を実施し、熊山遺跡群の須恵器がどこから供給されたのか推定した。胎土の比較をした生産地は備前、備中の須

恵器窯生産地である。

(2) 分析結果

胎土分析は蛍光X分析法で行い、胎土中の成分を測定した。測定元素は、10元素(SiO₂, TiO₂, Al₂O₃, Fe₂O₃, MnO, MgO, CaO, Na₂O, K₂O, P₂O₅)で、測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析計(日立ハイテクサイエンス社製SEA5120)を使用した。測定条件はX線照射径2.5mm, 電流50~200mA, 電圧50kV/15kV, 測定時間300秒, 測定室は真空の条件で測定した。

分析した須恵器は46点で器種としては杯, 碗, 小皿, 瓦塔, 円面硯, 風字硯などである。詳細は第1表に示している。分析結果は, XY散布図で表示し, 産地推定を行った。なお, 胎土に違いがみられる元素は, CaO, K₂Oなどの元素で, これらの元素で比較した。

A地点採集の輪高台が付く杯身(図版番号4・5, 以下番号のみ記載する)は, 第11図K₂O-CaOの散布図で備前領域(備前佐山東山窯跡)に分布。

B地点採集の輪高台が付く杯身(14)と小皿(18)は, 第12図K₂O-CaOの散布図で備前領域に分布。

C地点採集の輪高台が付く杯身(35・36・37)と碗(39), 円高台の碗(46・52), 回転糸切りの小皿(53~57), 回転糸切りの杯(58・60)は, 第13図K₂O-CaOの散布図で備前領域に分布。

E地点採集の輪高台が付く杯身(110)と瓦塔(123・124・127・129)は, 第14図K₂O-CaOで備前領域に分布。

F地点採集の輪高台が付く杯身(131)と回転糸切りの杯(138)は, 第15図K₂O-CaOで備前領域に分布するが回転ヘラ切りの杯(133)は, どの領域にも入らず産地がはっきりしない。

G地点採集の輪高台が付く杯身(180・181・182)は, 第16図K₂O-CaOで備前領域に分布。

H地点採集の輪高台が付く杯身(187・188), 回転糸切りの杯(195), 回転ヘラ切りの杯(197), 円高台の碗(202・207)は第17図K₂O-CaOで備前領域に分布。円高台の碗(204)は産地が不明。また, 円面硯(200), 風字硯(208)は第18図K₂O-CaOで備前領域に分布。

J地点採集の輪高台が付く杯身(252~258)と回転ヘラ切りの杯(260・262)は第19図K₂O-CaOで備前領域に分布。

以上のように, 各地点の須恵器の杯(輪高台・回転ヘラ切り・回転糸切り), 碗(円高台), 小皿(回転糸切り), 瓦塔, 硯などの産地を推定した。その結果, ほとんどの須恵器が備前地域の胎土に類似していることが推定された。しかし, 杯(133), 碗(204)が備前領域に入らなかった。また, 円面硯と風字硯は備前領域に推定された。そして, 瓦塔はほぼ1つの胎土にまとまること

から, 同一の個体と推定される。(白石)

5. おわりに

以上, 煩雑ではあるが各地点のおおよその時期について検討してみた。この結果, 地点により若干時期差があるものの, 8世紀後半から15世紀頃まで, ほぼ途切れることなく熊山遺跡を中心とする熊山山塊に多くの遺跡が存在していたことがわかった。また, これまでの調査研究では, 30基以上の石積遺構が確認されてはいたが, 時期等の実態では不明な点が多かった。しかし, このたび報告者の一人である大河内栄子の精力的な踏査で, 大変貴重な遺物が採集され, 改めて熊山遺跡群の重要性が明確になった。

この貴重な遺跡群は現在, 野獣による掘り起こし等で, 遺物の散乱が激しく, 遺跡消滅の危機にさらされている。今後, 各機関の早急な対応が望まれる次第である。(白石)

この資料報告では, 亀田修一先生に終始ご指導, ご教示頂いた。また以下の方々や機関にはいろいろご教示頂いた。末筆ではありますが記して感謝いたします(敬称略)。

有賀祐史, 石井 啓, 赤磐市教育委員会, 岡山市教育委員会, 備前市教育委員会

註

- 1) この報告では, 熊山遺跡を中心とする熊山山塊の遺跡のことを熊山遺跡群とよんでいる。
- 2) 一般にはこの地点が熊山山頂と言われている。
- 3) この多口瓶は熊山遺跡研究会副会長の岡野進氏により採集された。
- 4) この地点で, 今回の調査で新たに石積遺構を2基確認した。

引用・参考文献(五十音順)

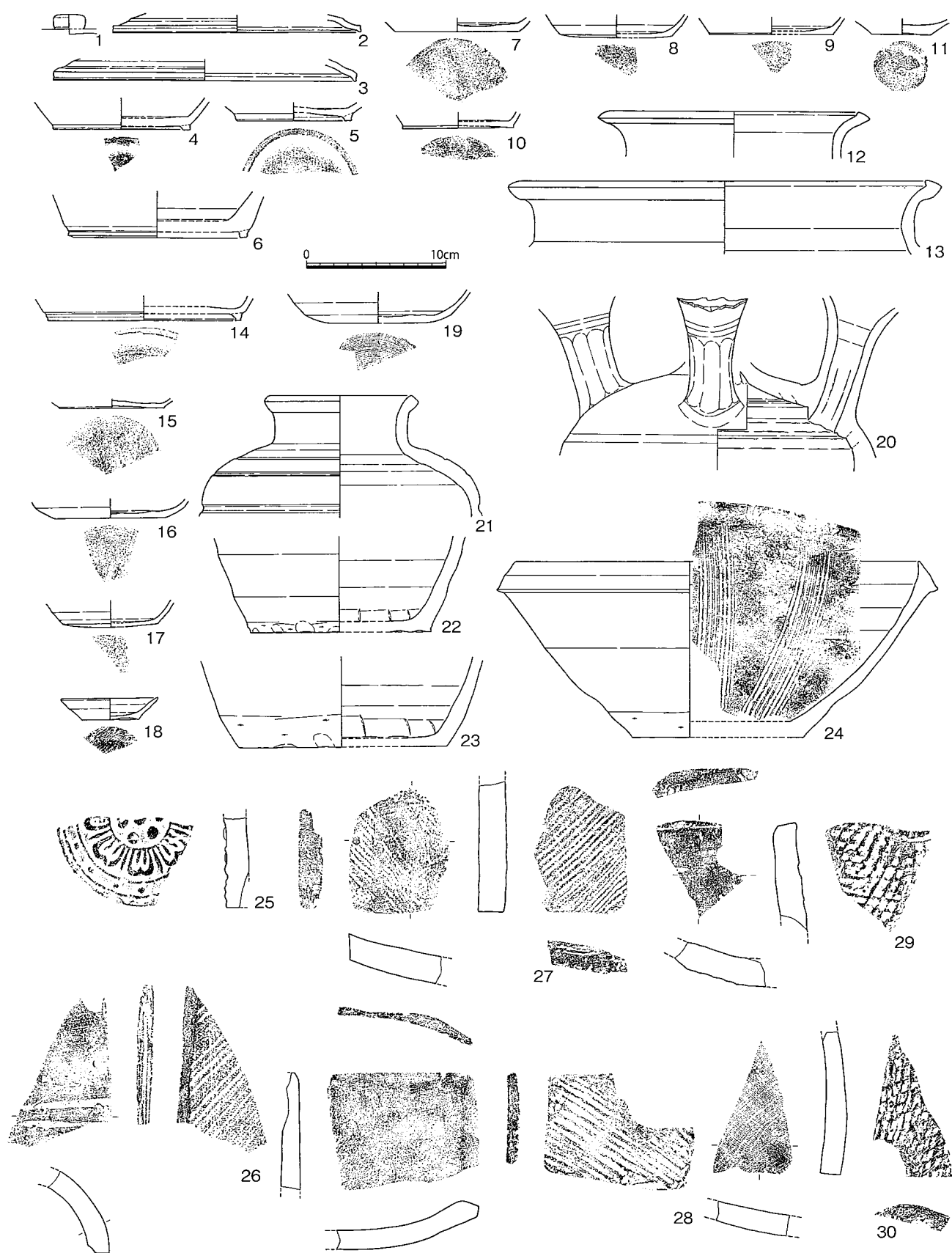
- 石井 啓, 重根弘和, 赤井夕希子 2012『医王山東麓窯跡群』備前市埋蔵文化財調査報告9 岡山県備前市教育委員会
- 上原真人 2002『古代の平地寺院と山林寺院』『佛教藝術』265号(特集 山岳寺院の考古学的調査 西日本編) 毎日新聞社
- 上原真人 2015「大野寺土塔から東大寺頭塔へ」『熊山遺跡仏塔説をめぐる諸見解 ~熊山遺跡の謎に再挑戦~』熊山遺跡群調査・研究会
- 亀田修一 2002「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学 -平井 勝氏追悼論文集-』古代吉備研究会
- 亀田修一 2015「古代邑久郡と朝鮮半島, そして」『熊山遺跡仏塔説をめぐる諸見解 ~熊山遺跡の謎に再挑戦~』熊山遺跡群調査・研究会
- 草原孝典2004『ハガ遺跡-備前国府関連遺跡の発掘調査報告-』岡山市教育委員会
- 熊山町文化協会 1974『熊山遺跡』

高橋 2009「熊山南山崖採集の須恵器」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 岡山市教育委員会
 福田正継 1981「中世土器につて」『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46 岡山県教育委員会

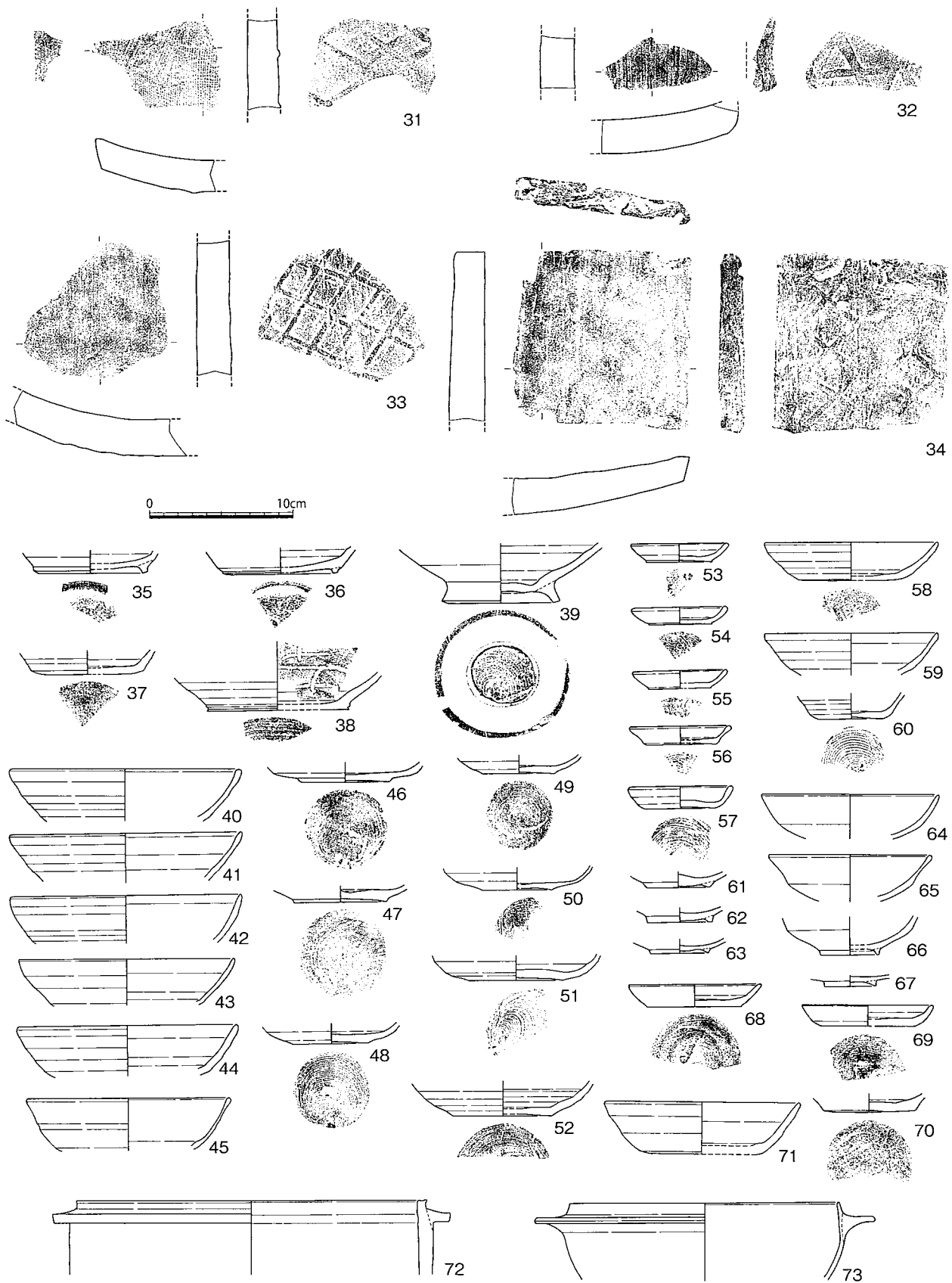
連絡先
 【大河内栄子 〒701-4265 岡山県瀬戸内市長船町福岡834-1】
 【福田正継 〒701-1202 岡山市北区栖津2500-1】
 【白石 純 〒700-0005 岡山市北区理大町1-1
 岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科】

第1表 胎土分析した須恵器一覧表 (%)

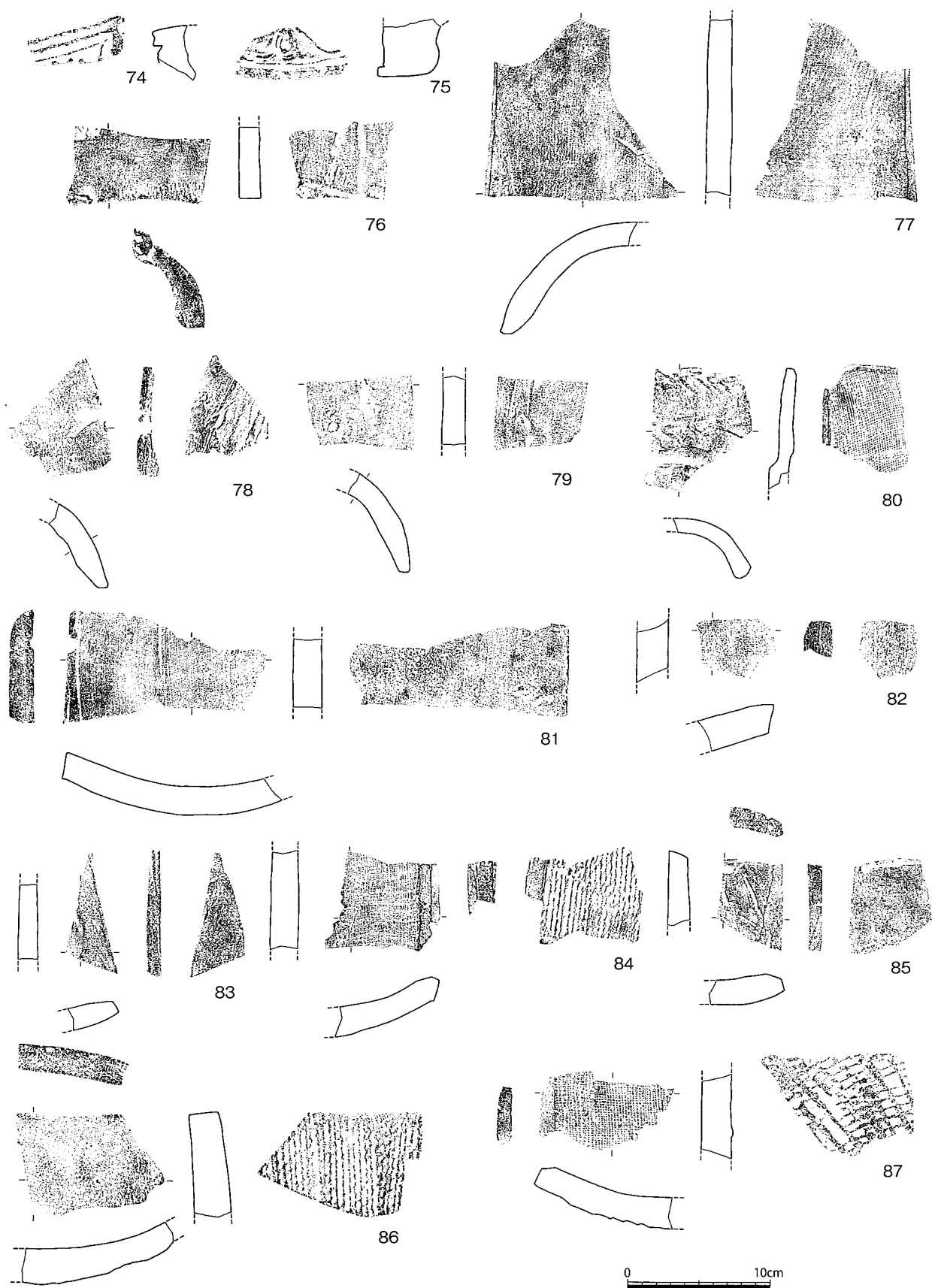
図版番号	地点名	器種	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅
4	A地点	杯身（輪高台）	68.87	1.02	18.07	6.86	0.06	1.77	0.29	0.45	2.49	0.06
5	A地点	杯身（輪高台）	66.56	1.13	18.89	8.24	0.05	2.15	0.40	0.00	2.46	0.06
14	B地点	杯身（輪高台）	71.65	0.87	17.15	5.49	0.04	1.56	0.44	0.00	2.61	0.03
18	B地点	小皿	73.82	0.86	15.75	4.86	0.00	0.56	0.68	0.95	2.32	0.05
37	C地点	杯身（輪高台）	69.83	1.09	17.83	6.81	0.04	1.26	0.37	0.00	2.62	0.04
35	C地点	杯身（輪高台）	73.64	0.97	15.62	5.71	0.04	0.36	0.58	0.00	2.94	0.02
36	C地点	杯身（輪高台）	70.99	0.81	17.84	6.57	0.04	0.37	0.58	0.00	2.70	0.03
39	C地点	碗（輪高台）	70.11	0.61	18.33	4.50	0.02	1.91	0.78	0.85	2.74	0.06
46	C地点	碗（円高台）	74.31	0.74	16.90	4.22	0.00	0.54	0.48	0.00	2.65	0.07
52	C地点	碗（円高台）	76.46	0.72	15.43	3.34	0.00	0.26	0.43	0.46	2.66	0.05
53	C地点	小皿（回転系切り）	78.99	0.69	13.07	3.10	0.04	0.60	0.39	0.66	2.32	0.03
54	C地点	小皿（回転系切り）	74.70	0.76	15.32	4.04	0.00	0.62	0.74	0.86	2.75	0.03
55	C地点	小皿（回転系切り）	75.04	0.81	15.26	4.17	0.01	0.36	0.74	0.58	2.83	0.03
56	C地点	小皿（回転系切り）	79.08	0.63	13.03	2.91	0.00	0.53	0.49	0.45	2.72	0.04
57	C地点	小皿（回転系切り）	75.53	0.71	15.34	3.97	0.02	0.64	0.59	0.37	2.69	0.05
58	C地点	杯（回転系切り）	76.66	0.72	13.88	3.33	0.03	0.61	0.72	1.05	2.75	0.05
60	C地点	杯（回転系切り）	75.77	0.68	15.41	3.29	0.00	0.74	0.46	0.74	2.75	0.05
110	E地点	杯身（輪高台）	67.62	0.84	18.59	6.03	0.00	2.09	0.64	1.06	2.97	0.04
123	E地点	瓦塔	66.56	1.08	20.20	7.63	0.00	1.94	0.27	0.00	2.20	0.03
124	E地点	瓦塔	70.18	1.10	18.05	6.36	0.03	1.05	0.51	0.00	2.55	0.04
127	E地点	瓦塔	71.70	1.07	16.54	5.90	0.00	1.68	0.37	0.00	2.58	0.05
129	E地点	瓦塔	71.41	1.05	17.50	5.77	0.02	0.73	0.58	0.00	2.81	0.03
131	F地点	杯身（輪高台）	70.09	0.89	18.74	5.33	0.00	1.94	0.56	0.01	2.26	0.06
133	F地点	杯（回転ヘラ切り）	74.00	1.02	17.01	5.70	0.02	0.73	0.12	0.00	1.28	0.05
138	F地点	杯（回転系切り）	68.62	1.06	18.31	6.88	0.06	1.98	0.66	0.31	1.99	0.04
181	G地点	杯身（輪高台）	70.51	0.89	17.57	6.06	0.21	1.11	0.56	0.00	2.95	0.03
180	G地点	杯身（輪高台）	68.82	1.00	18.12	8.10	0.04	0.60	0.48	0.00	2.72	0.03
182	G地点	杯身（輪高台）	69.35	0.86	18.65	6.02	0.01	1.81	0.25	0.00	2.93	0.04
187	H地点	杯身（輪高台）	71.80	0.95	16.69	6.88	0.06	0.41	0.64	0.01	2.38	0.04
188	H地点	杯身（輪高台）	65.07	0.87	19.73	9.85	0.06	1.34	0.71	0.00	2.26	0.02
195	H地点	杯（回転系切り）	73.26	0.78	16.04	4.33	0.00	1.64	0.52	0.74	2.53	0.06
197	H地点	杯（回転ヘラ切り）	68.67	1.45	17.58	6.72	0.04	2.17	0.23	0.00	2.96	0.05
202	H地点	碗（円高台）	71.97	0.54	16.32	4.26	0.01	1.81	0.93	1.22	2.70	0.07
204	H地点	碗（円高台）	73.62	1.05	18.46	4.19	0.09	1.21	0.17	0.00	1.06	0.07
207	H地点	碗（円高台）	71.00	0.80	18.68	4.82	0.02	1.68	0.45	0.00	2.44	0.04
200	H地点	円面硯	69.07	0.80	18.13	5.87	0.05	1.74	0.50	0.79	2.90	0.04
208	H地点	風字硯	71.00	0.71	16.85	5.83	0.05	1.25	0.50	0.55	3.12	0.05
252	J地点	杯身（輪高台）	72.26	0.91	17.68	4.79	0.00	0.64	0.62	0.37	2.59	0.03
253	J地点	杯身（輪高台）	72.14	1.00	17.33	5.05	0.05	1.94	0.35	0.01	1.96	0.07
254	J地点	杯身（輪高台）	72.51	1.06	17.07	5.12	0.00	1.82	0.30	0.00	1.97	0.06
256	J地点	杯身（輪高台）	72.37	0.88	16.74	6.07	0.03	0.73	0.48	0.00	2.53	0.04
257	J地点	杯身（輪高台）	70.54	0.96	18.38	5.80	0.02	0.94	0.43	0.02	2.66	0.04
258	J地点	杯身（輪高台）	75.40	0.92	16.35	3.77	0.02	0.37	0.43	0.00	2.57	0.03
259	J地点	杯（回転ヘラ切り）	70.43	0.85	16.96	6.11	0.06	1.84	0.64	0.42	2.45	0.04
260	J地点	杯（回転ヘラ切り）	76.79	0.74	14.75	4.53	0.00	0.25	0.23	0.00	2.55	0.05
262	J地点	杯（回転ヘラ切り）	76.16	0.99	16.02	4.39	0.00	0.26	0.26	0.00	1.79	0.04



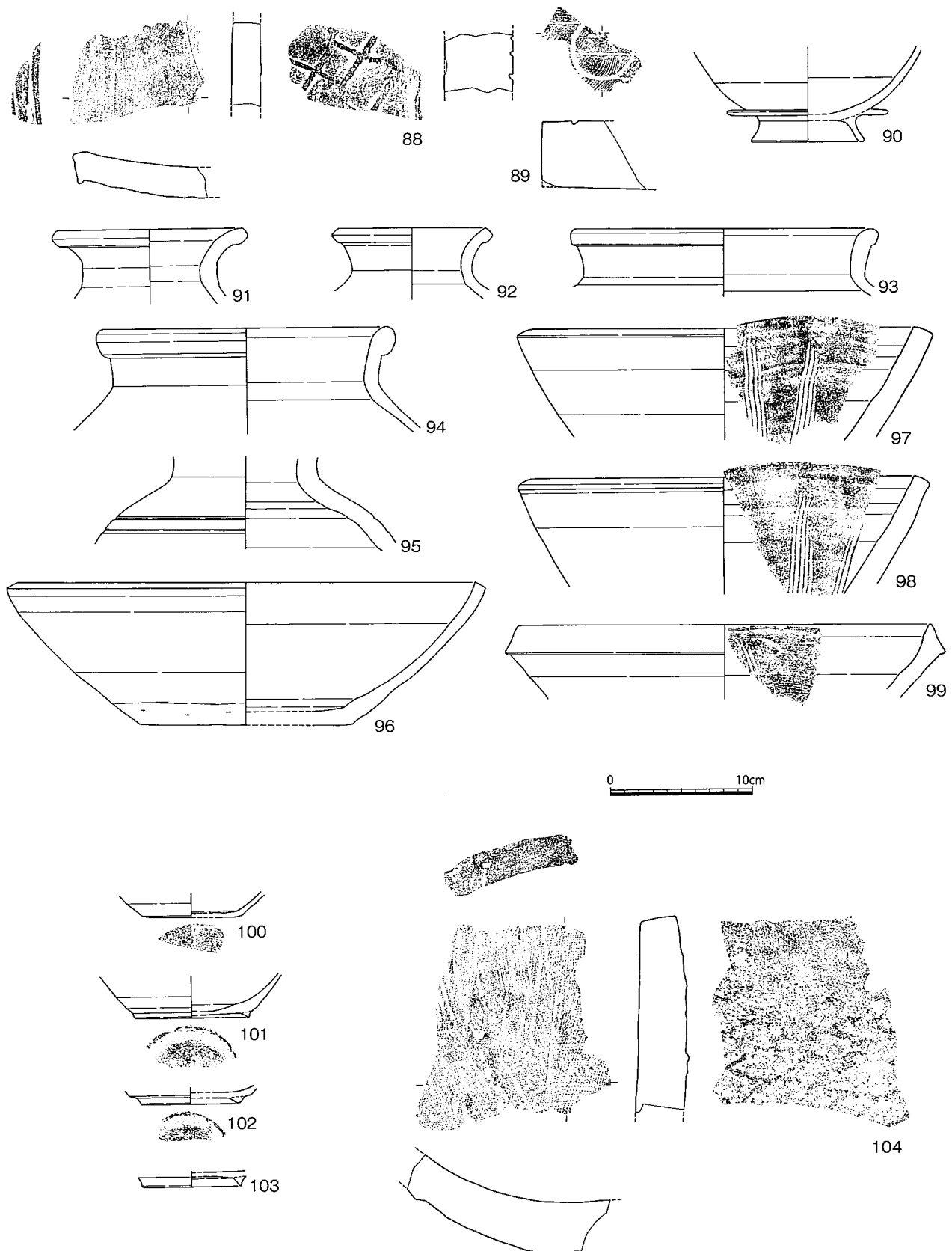
第2図 熊山遺跡群採集遺物① A地点 (1~13), B地点 (14~30)



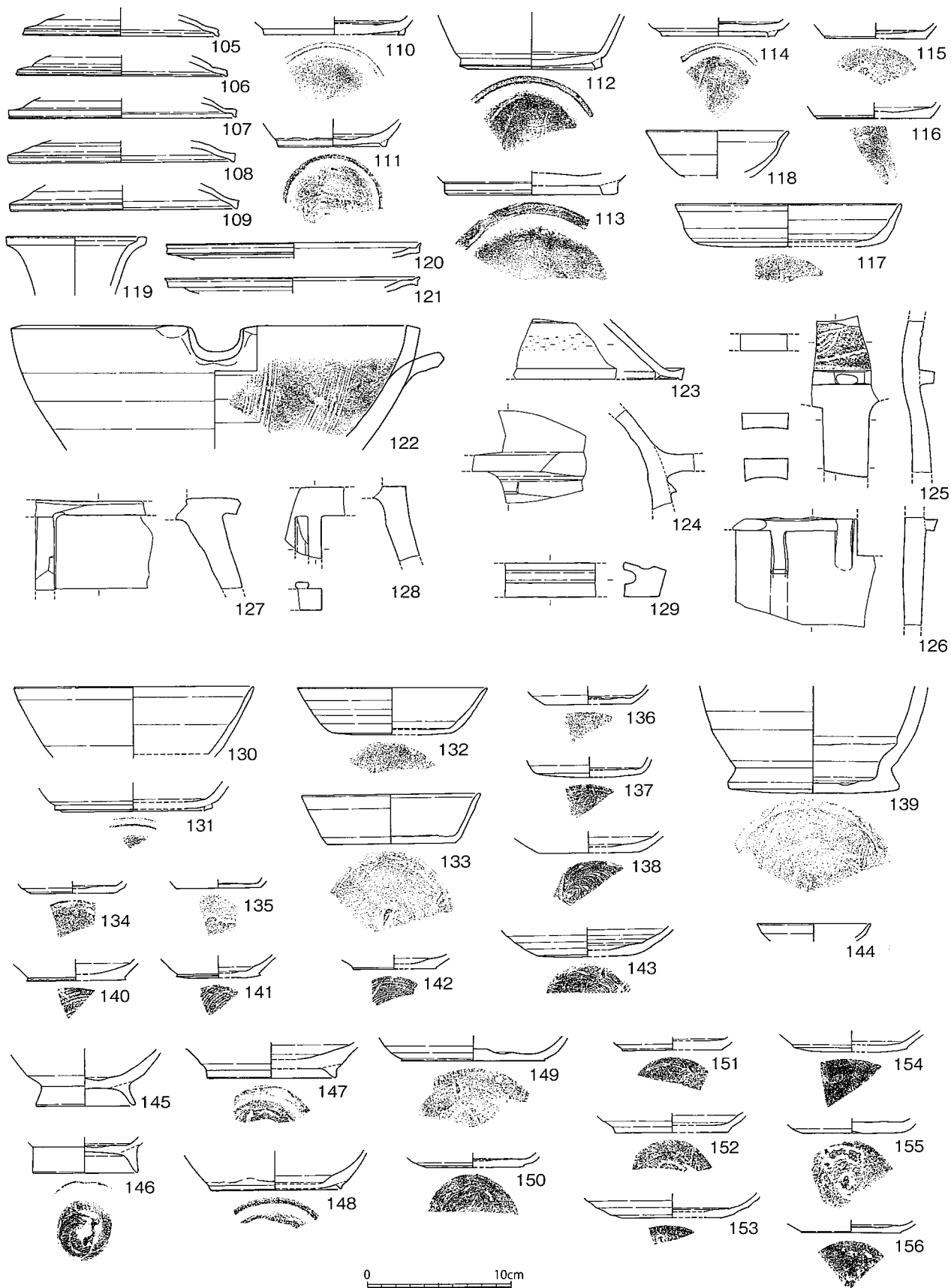
第3図 熊山遺跡群採集遺物② B地点 (31~34), C地点 (35~73)



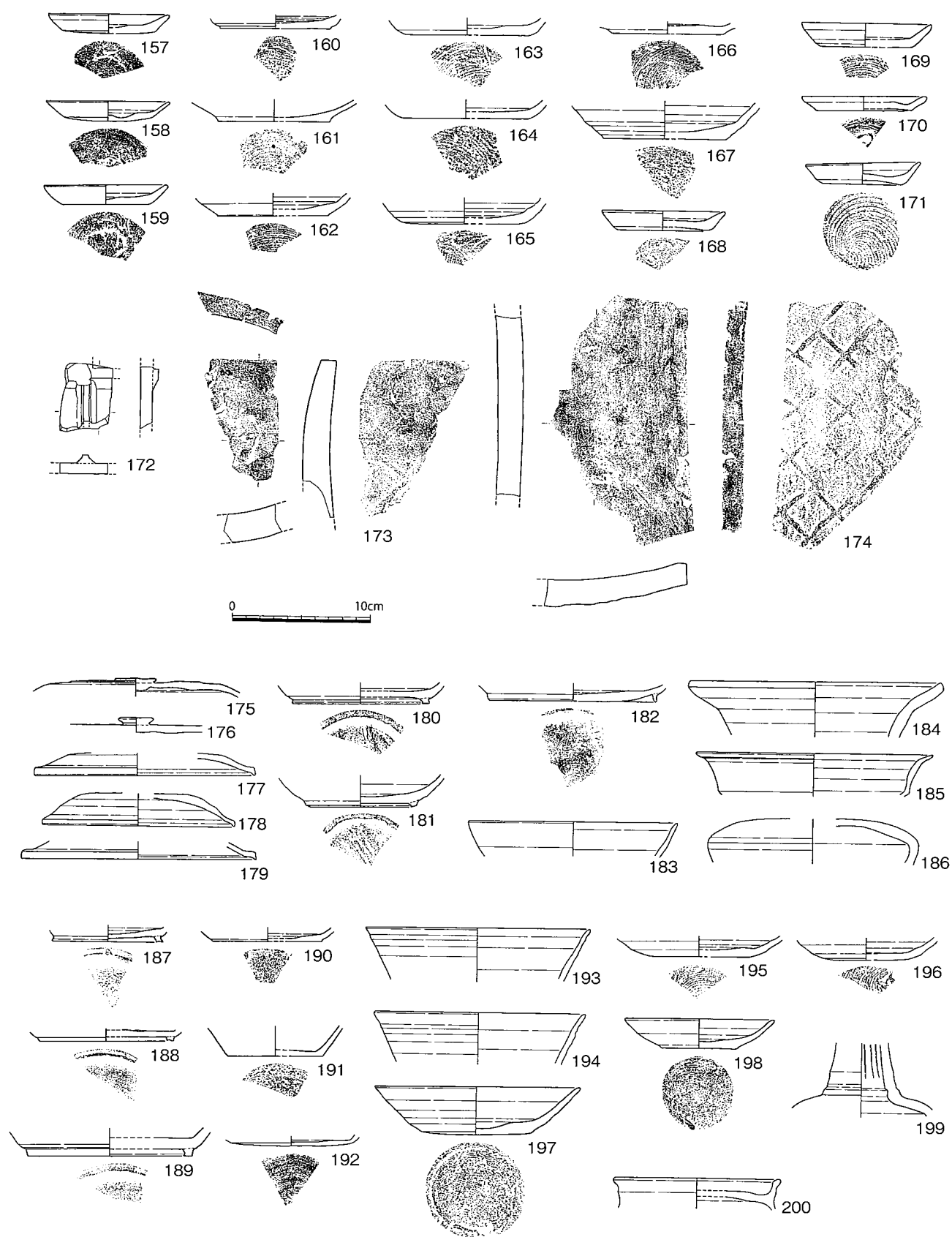
第4図 熊山遺跡群採集遺物③ C地点 (74~87)



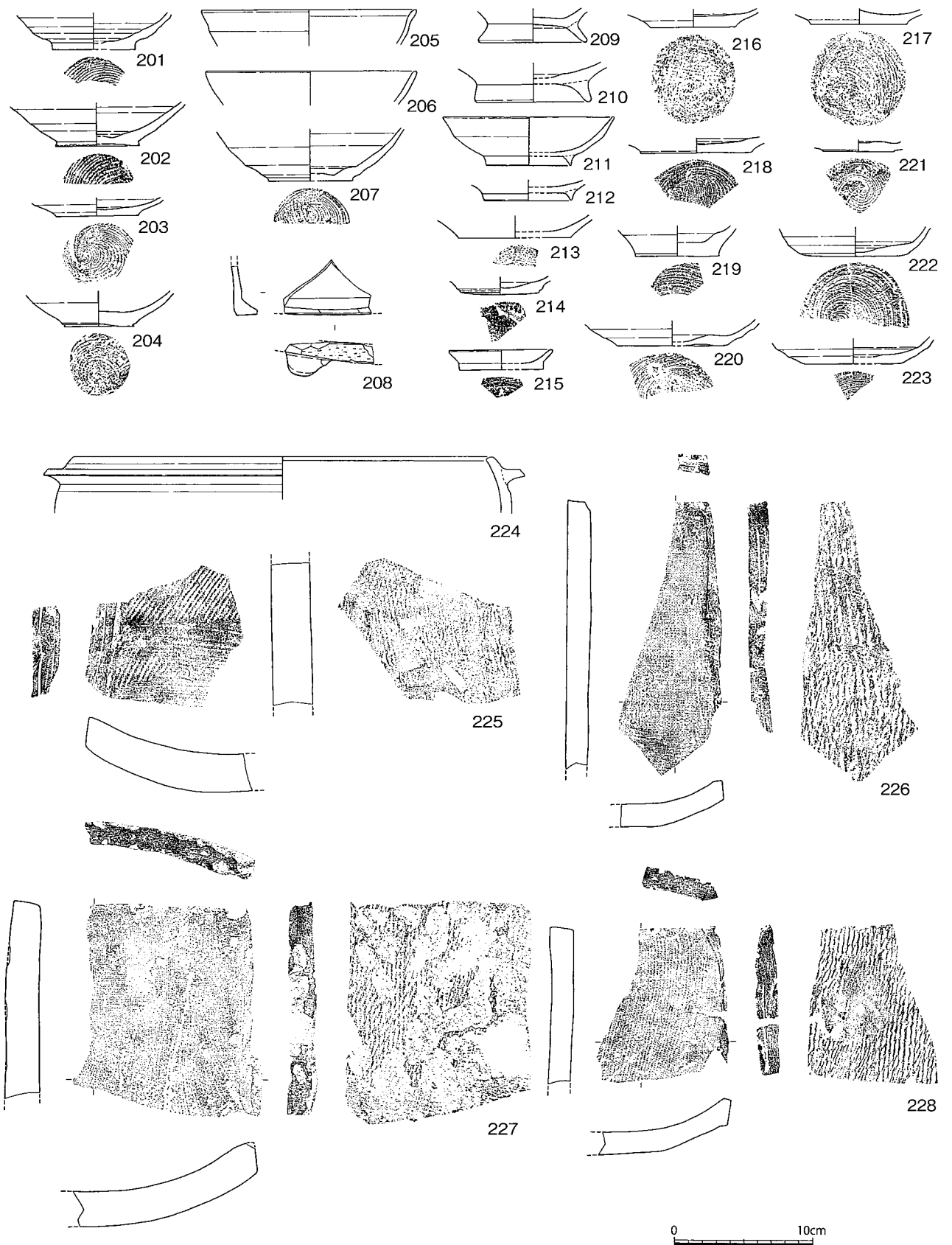
第5図 熊山遺跡群採集遺物④ C地点 (88~99), D地点 (100~104)



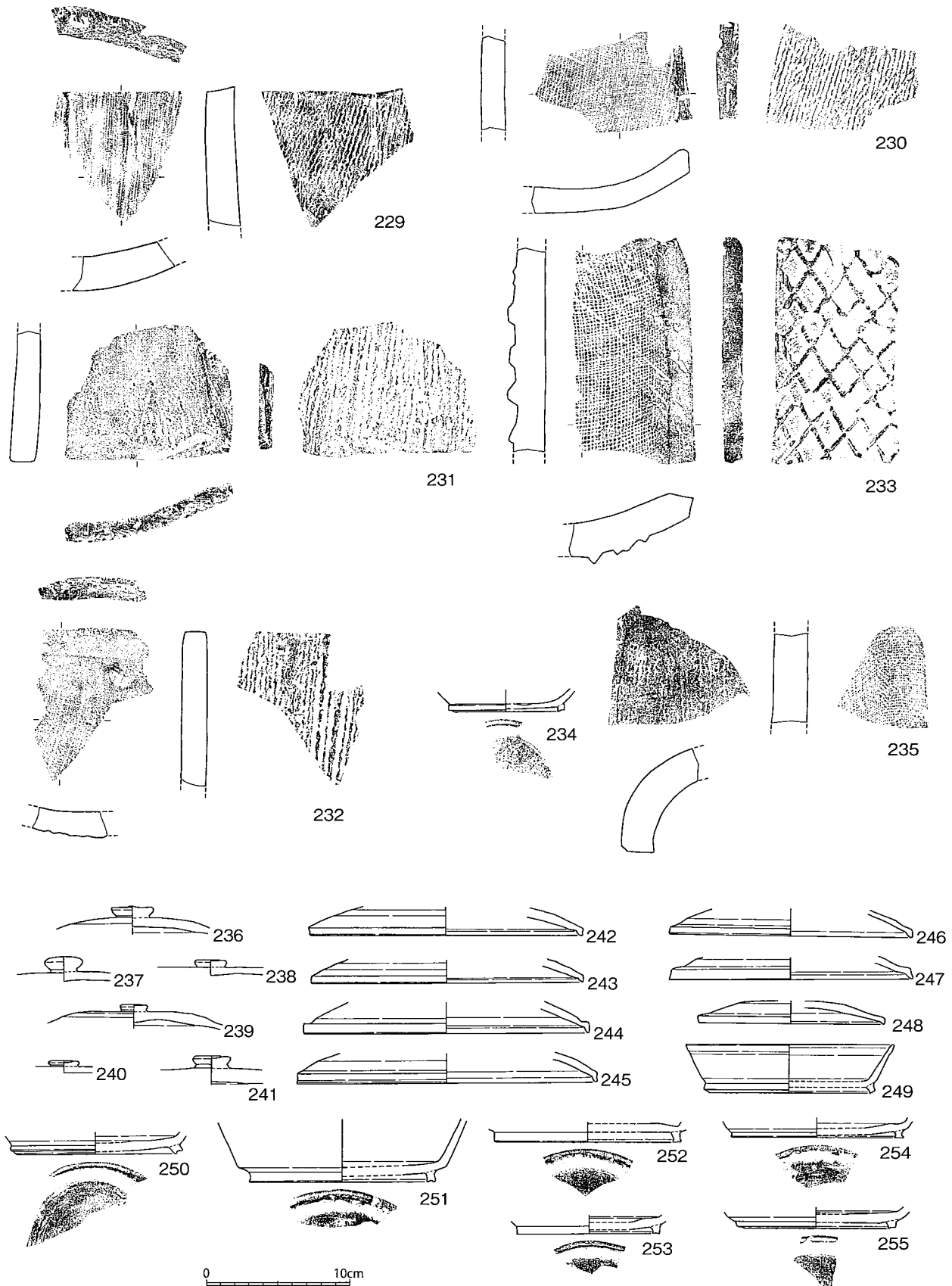
第6図 熊山遺跡群採集遺物⑤ E地点 (105~129), F地点 (130~156)



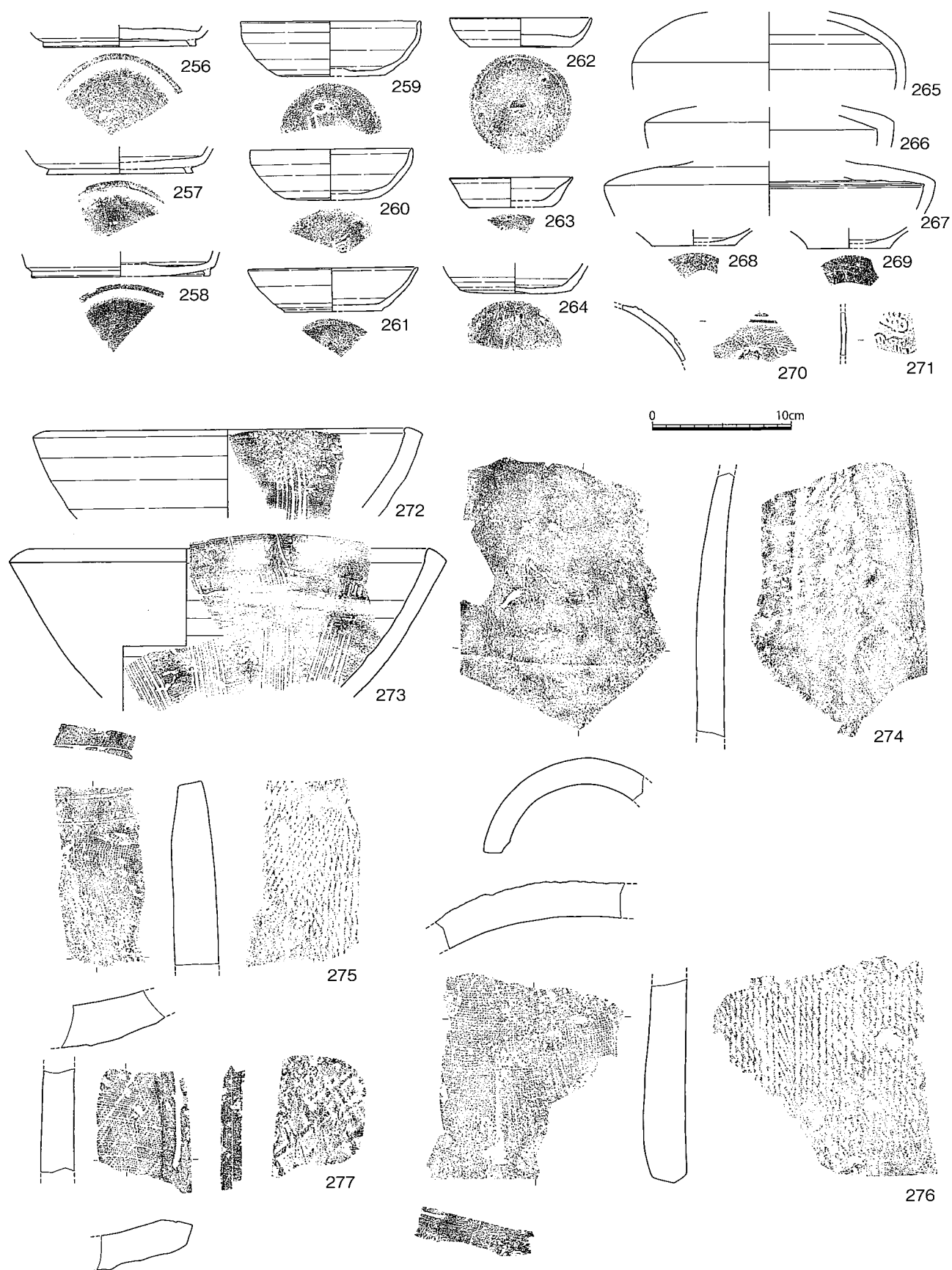
第7図 熊山遺跡群採集遺物⑥ F地点 (157~174), G地点 (175~186), H地点 (187~200)



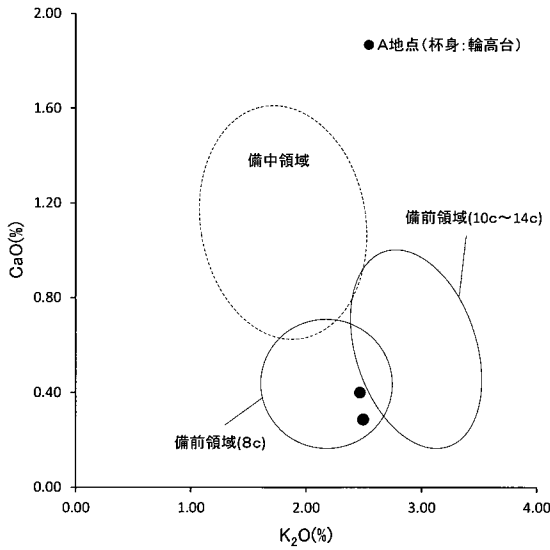
第8図 熊山遺跡群採集遺物⑦ H地点 (201~228)



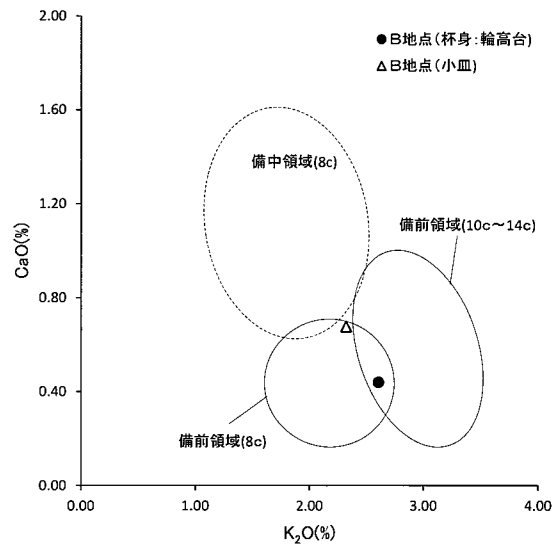
第9図 熊山遺跡群採集遺物⑧ H地点 (229~233), I地点 (234~235), J地点 (236~255)



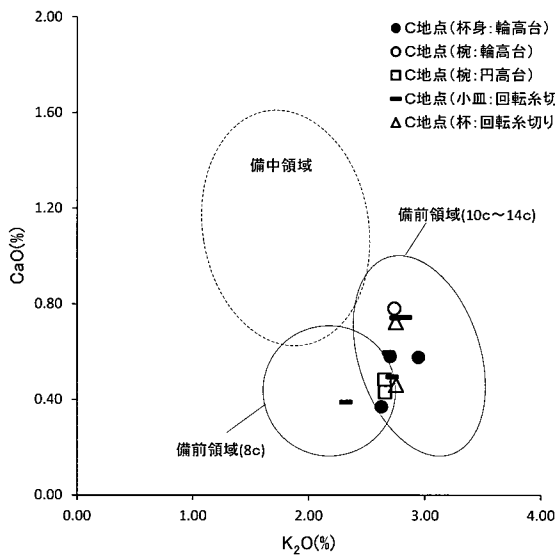
第10図 熊山遺跡群採集遺物⑨ J地点 (256~271), K地点 (272~277)



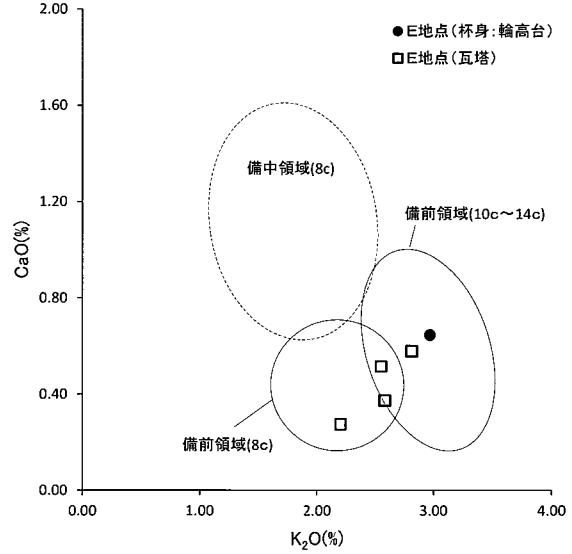
第11図 熊山遺跡群A地点採集遺物の産地推定



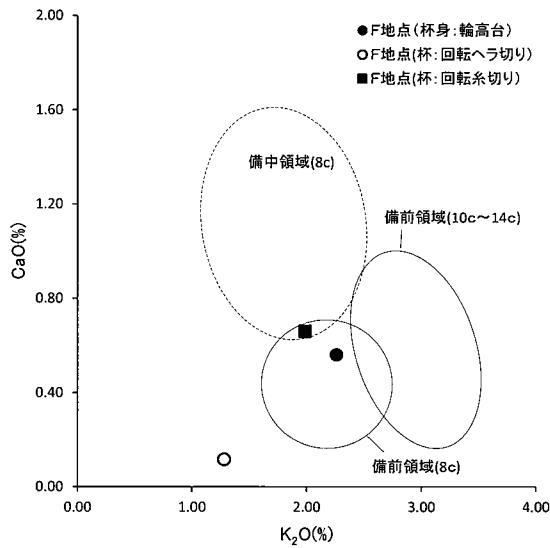
第12図 熊山遺跡群B地点採集遺物の産地推定



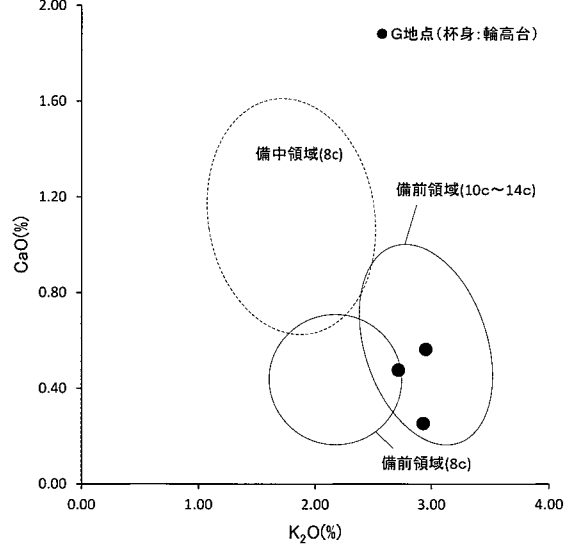
第13図 熊山遺跡群C地点採集遺物の産地推定



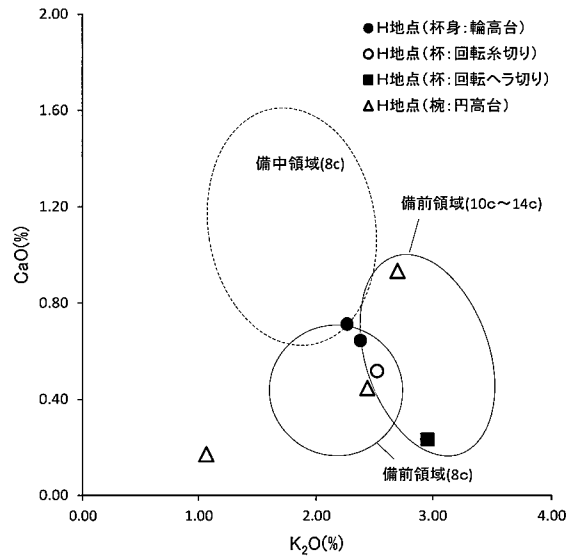
第14図 熊山遺跡群E地点採集遺物の産地推定



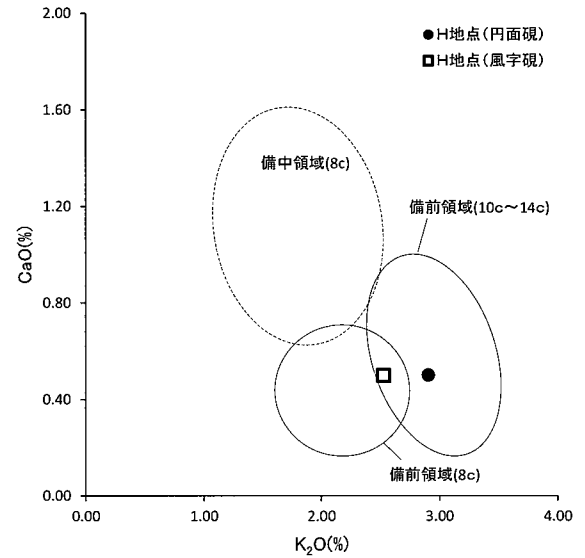
第15図 熊山遺跡群F地点採集遺物の産地推定



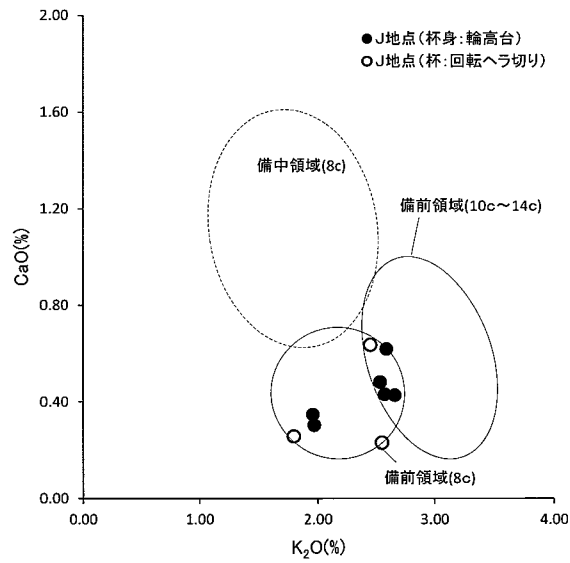
第16図 熊山遺跡群G地点採集遺物の産地推定



第17図 熊山遺跡群H地点採集遺物の産地推定



第18図 熊山遺跡群H地点採集遺物の産地推定



第19図 熊山遺跡群J地点採集遺物の産地推定